

ウィリアム・アーヴィン著

## ウォルター・バジ ョ ッ ト (10)

訳： 渡 辺 弘  
立 川 順 子

### 第10章 技巧とユーモア

評論を書く際のバジ ョ ッ トの全般の方法、すなわち彼の「法式」(“formula”)は、当時の慣例、特にマコーレイのそれに多くを負っている。難解で理性的な調子、長い脱線、政治学と歴史によって文学に変化を添える傾向、逸話的、逆説的表現、新奇な理論の愛好、書物よりも人物を好む点は、両作家に共通してみられる特徴である。実際、私は更に突き進めて、両者の評論は二つの同じ概括的類型に入ると主張したいと思う。すなわち、一方に物語風の、伝統的なものがあり、他方に解説的、批評的なものが存在しているのである。

『クライブ卿』(“Lord Clive”)は『エドワード・ギボン』(“Edward Gibbon”)に、『ミルトン』(“Milton”)は『人間シェークスピア』(“Shakespeare—the Man”)に比較することが可能である。しかし、その比較は正確ではなく、不一致を示すことはあまりに複雑な過程となるであろうから、ここで試みるには価しない。生来の精神の諸特質からくる、根本的な方法論の点で大いに異なるとはいえ、両作家は形式、技巧、慣習の使用において著しい類似性を顕わにしており、これらの類似性は、私がかもつか証明しようとするのとおり、後者(バジ ョ ッ ト)がかなりの程度まで前者(マコーレイ)を模倣したことを示している。

バジ ョ ッ トが書物の批評よりも作者に興味を抱いたことは、記憶されねばならない。技巧に関して、彼の人物研究は特質を列举し、それらを解説するという通常の決まりきった慣例に驚くほど依存していない。明快で才気にあふれた一般化の観点から個々の人物を見るという彼のきわ立った才能は、彼に二つの

逃げ道を許している。機知に富んだユーモラスな語りに集中し、人物を劇的に発展させるか、類型もしくは原則に関する火花を発するような警句的、逆説的描写を詳細に行い、説明として人物を引用するかのどちらかである。これらの技巧は、実際には言うまでもなく全く別々のものである。『ハートリー・コールリッジ』(“Hartley Coleridge”)と『クラフ氏の詩』(“Mr. Clough's Poems”)においては、両者が並行して使用されている。『エドワード・ギボン』と『メアリー・ワートリー・モンタギュー夫人』(“Lady Mary Wortley Montagu”)では最初の方法が、『ジョン・ミルトン』(“John Milton”),『人間シェークスピア』,『チャールズ・ディッケンズ』(“Charles Dickens”)では二番目のやり方が著しく支配的である。

これら二つの技巧を解説するにあたって、『エドワード・ギボン』と『ジョン・ミルトン』を論ずるのを避けて通ることは出来ない。そして恐らく私はそれらについてすでに多くを語りすぎたであろう。多くの点で『エドワード・ギボン』は短い物語、あるいはむしろ簡潔な話に近い。ギボンの生涯のそれぞれの局面——すなわち、彼の若い頃の精神的冒険、軍隊の経験、恋愛事件、政治上の経歴は、一つの顕著な事実、つまり偉大な歴史家(ギボンのこと：訳註)は大そう温厚で気持のよい人間であるということを指摘するために描写されている。そこでは小説的方法が採られているが、控え目なやり方で成されている。語りはほんの時にたま寄せ集められて場面を構成するにすぎず、これが詳細に論じられることは稀である。ただ例外として原資料が引用されることはあり、ギボンの場合、『自叙伝』(*Autobiography*)の中に容易に見出される。対話は勿論、試みられていないが、確実な意見と言葉、権威者からの普通の引用でさえも、しばしば極度に劇的な方法で紹介されている。バジョットはノース卿(Lord North; 1732-92 イギリスの政治家、'70~82首相。この間北米の独立戦争に際し、バークらの反対を退け、ジョージ3世の強硬策を支持。結果的にイギリスの敗北を招いた：訳註)が怒りをあらわに示すことは殆どなかったと述べている。——『紛れもなく、私はあの忌むべきもの、首相であり、他人もまたそうあったらと願望しているものと信ずる』と彼は脂肪のついたわき腹を軽く叩きながら言った<sup>1)</sup>。しかし、バジョ

ットは物語作者の最も弱点とするところ——すなわち飾らぬ概説に優れている。生き生きとした警句的な言葉使いは、ひどく現実離れした題材にも興味とユーモアを注入している。国会議員として、ギボン「時の政策を静かに穏やかに支持した」<sup>1)</sup>。キョルショー嬢とのちょっとした恋愛沙汰に賢明に終止符を打ったあとで、「きわめて信頼出来る若者で、奇妙にも大著を著わす傾向があり、フランス風の言葉使いと概念を少し好みすぎるところがあるが、常識という重要な感覚と、一時的な感情よりも永続的な金銭の方を賢明にも選択した人間であると家族からみられたのは正当なことである」<sup>2)</sup>。バジョットがギボンについて語らねばならないことの殆ど全ては、「彼が賢明にも永続的な金銭を選択したこと」という言葉から推論することが出来る。

『ジョン・ミルトン』はバジョットの人物描写の二番目の方法の最も完全な具体例であると同様に、恐らく最も秀逸な実例であろう。彼はこの世には二種類の善、すなわち感覚的善と審美的善が存在すると主張することから口火を切っている。感覚的善は「外的刺激に対する感受性」に依存し、その特徴をバジョットはダビデ王を実例として引用しながら、完全で極度に人格が統合された類型であると詳細に解説している。審美的善は「防御する本能」、「世間を拒絶する」原理、「われわれを苦しめるかもしれないものから逃避し、われわれを魅惑するかもしれないものを忌避し、誘惑する可能性のあるものを避ける……衝動」<sup>3)</sup>に基づいている。この原理からバジョットはまたその細部において驚嘆するほどより複雑でさえあり、その中心となる論理において統一されているある類型を詳細に論じている。今や全て準備万端整えられている。対照的な鋳型が提示され、ダビデ王は最初の鋳型に合わされた。それ故に、ミルトンは第二の鋳型に案内され、誇らしげにそれに合わされる。その評論の残りほぼ全ては、彼(ミルトン)が審美的善の顕著な実例であることを論証するのに寄与している。

語りににおいて機知に富み、ユーモアにあふれていて、説明においては才気煥発で明快であるが——たとえ時としてやや冗長であるにしても——批評家としてのバジョットにはその描写力を活用する機会は殆どなかった。その描写力はかなりのもので、より一層の修練に値するものであったように思われる。クラ

ブ・ロビンソンについての次に記す簡潔な描写のような筆致は非常に効果的である——「彼の顔はその生氣、優しさ、鋭敏さの故に好感を与えるが、鼻は自然がこれまで生産したうちで最もぞんざいなものであり、過度に長い顎は驚くべき伸張力をもっている」<sup>1)</sup>。バジョットは概念に興味をもちすぎるあまり、外的なものには心が向かわなかった。そして、クラブ・ロビンソンは彼と同時代の人々のうちで、何らかの意味でその外見をバジョットが描写しようとした唯一の人間である。

バジョットは三つの文体をもっていると言える——すなわち文学的文体、哲学的文体、ジャーナリズム的文体である。最初の文体は彼が『エコノミスト』誌の編集者となる1859年の時期まで榮んに使われている。後の二つはそれに続く時期に発展する。二番目と三番目は主として目的と強調の点において最初のものとは異なっており、それらが書かれる際の注意の度合においてのみ、お互に異なっている。一方はかなり推敲されており、他方は時として荒けずりでおざなりである。バジョットの後期の著作は殆ど常に明快で活力に富み、言葉使いが生き生きと警句的であることがしばしばで、構成の点で入念ではないにしても、慎重といえるほどに修辭的である。しかし、概してその長所は実利的であることである。微妙に洗練された技巧、装飾的な想像力は存在していない。私が哲学的文体と呼んだものは、学問のある知識人に真理を伝えるよう意図されている。彼のジャーナリズム的文体は充分な知識のない人々に基本的な事項を伝授するためのものである。サー・ロバート・ジフェンは『エコノミスト』誌に執筆する際にバジョットは次のようであったと言明している——

その心眼の中に常にある典型的な実業家 (City Man) を描いていた。つまり、それは文学や語句の言いまわしには巧みではなく、語彙や理論の知識は限られているが、自分に是非ともかわるものに関する情報と案内の故に、事実と読書に対しては感覚が鋭い人間である。この理想的な実業家像を満たすために、バジョットは粗雑で生硬な、或は冗長な表現を用いたものであった。時として、それは通常の試験で試されたら、文法を無視したもので、その言わんとするところを納得させるためには何でもよかったのである<sup>2)</sup>。

彼の文学的文体は、哲学的文体、ジャーナリスティックな文体の長所とその他多くの長所を含んでいる。その文体は同様に明快で活力にあふれ、口語的であるが、その範囲においてはいっそう無限なほどに広く、調子と構成の点ではより変化に富み、暗示するものがより豊かである。それはたいそう柔軟性があり、機知に富み、きびきびした会話から、いつのまにか、すばやく力強い知的な雄弁に移行する。時折、それは純粹な詩の火花の中で爆発することがあるが、逆説と警句、ユーモアと風刺の中で本領を発揮する。その主要な技巧上の優秀性は、生き生きとして印象的な言葉使いにあるが、強固な修辭的構造の確かさを欠いているわけではなく、時には極端に修辭的である。全体的にみて、バジョットの散文は多くの生来の才能と少なからぬ考え抜かれた技巧を明らかに示している。それに慎重な修正が加わったなら、その文体は真に卓越したものとなったであろう。彼の文体の手本となったのは、恐らくハズリットとマコーレイであろう。彼はまた、パークをも入念に読んだにちがいないが、当時パークはハズリット以上に壮重体で書いており、特に散文の場合は壮重体が真のイギリス的慎しみに違反するものであるとバジョットは秘かに感じていたのではないかと思われる。これほど高遠、詩的で法外なほどに情熱的な文章は、文学好きの若き実業家の心に対抗意識をめざめさせるようなことはなかった。

いずれにしても、彼バジョットの著作のうちで、偉大な雄弁家の影響を暗示させるものは、『クーデターに関する書簡』に散見される筆致や、特にカトリック教会についての長い一節を除いては殆どみられない。後者は実際どこかパークの持続力と雄弁、簡潔で活力にあふれた修辭を含んでいる。しかし、概してマコーレイとハズリットの方が彼の趣味により近かった。前者は明快な——恐らく明快すぎる——解説の模範であり、後者は生命感にあふれた力強い文章の典型であった。両者は共に逸話風、修辭的で簡潔な語り、すなわち評論の形式の大家であった。バジョットが他の作家から学ぶことの出来たものを彼は恐らくこの両者の中に見出したであろう。

修辭的になるとき、バジョットはハズリットの名状しがたい多様性よりも、重苦しい明白さにより近づく。マコーレイの特徴的な均衡、対照法、直列法は

バジョットの中にしばしば見出される。実際、バジョットはその師匠と同様に、もって生まれた思考能力を越えて、これらの技巧を発展させ、例えば次のような文章に関して遺伝性の精神的弱さについての議論を要訳するという罪をときとして犯している——

しかし、説明可能であれ、説明不可能であれ、驚くべきことであれ、驚くにあたらぬことであれ、その事実は明白である——すなわち、善悪両方に対する傾向と誘惑は、神に仕える者にも、そうでない者にも、第4世代にまで伝えられるのである<sup>3)</sup>。

更にその上に、マコーレイの『歴史』(*History*)のやり方にならって、彼は一連の短い平行する節によって、語りにおける様々な出来事のすばやい順序を暗示する——「ナポレオンの時代が始まった。独裁政権という言葉が定着し、フランスの地固めが開始される」<sup>3)</sup>。分析の箇所では、バジョットは彼の敬愛する人々と同様に、より力強く断音的 (*staccato*) なリズムにすらなる傾向がある。ハズリットのジェフリー卿描写とバジョットによるフランシス・ホルナー (Francis Horner) の描写とは興味深い比較を提供している——

彼は対照の名手である。彼は機知と論争という目もくらむような弁論の巧みさを誇らしげに被ろうする。彼の強みは知識の広範さと主題の原理と詳細を同様に熟知していること、文体のきらめくような才気とテンポの速さの中にある<sup>4)</sup>。

.....

彼は誰かを強制する手段は一度ももったことがなかった。彼には派手な才能が欠けていた。彼は大衆の集会で、人々の心を奪ってとりこにするような強烈な雄弁や圧倒的な情熱をもたなかった。彼の行政手腕は殆んど試されず、恐らくそれは少し疑問視されるかもしれないものである<sup>4)</sup>。

バジョットによって使用されたその他いくつかの修辭的技巧は、ハズリットとマコーレイに由来をさかのぼることが出来るが、そのような比較は確証するには難しすぎ、それらを深く追求するには不明瞭すぎる。押しつけがましくはないが、バジョットがかなり修辭を利用した点において、彼は二人のより著名な先人達から多くを学んだように思われると述べるだけにとどめておこう。バジョットの文体は「イメジャリーが豊かである」とは表現しがたい。確かに、彼

はいくつかのたいそう詩的な一節を完成したことはあった。クーパーが法学院 (the Temple) に住む若き文学青年であった時期に、いかにして自殺未遂を犯したかを語ったあとで、彼は次のように感嘆の言葉を発している——

これまで引用されてきた話の間じゅうずっと、しゃれこうべのように、われわれはつきまとうように思われる、言わばわれわれの人生の骸骨とも言うべき暗い現実から離れて、人生のなめらかな表面上で『安逸な』生活を送りながら、『セント・ジェームス・マガジン』(St. James's Magazine) にいくつかのエッセイを、『セント・ジェームス・クロニクル』(St. James's Chronicle) にも何篇か寄稿した気楽な青年の日常にとって、『緋色の装丁の部厚い書物』と『私は永遠のふちにいたということをはっきり示している』充血した目とは、何と対照的なことであろうか。<sup>6)</sup>

概して、バジョットは純粹に詩的な効果を試みることは稀で、実際それを行う場合は、成功するのとほぼ同じ位、失敗している。『初期のエディンバラ評論派たち』における自然崇拜の心理を説明している一節は、『ハートリー・コールリッジ』の冒頭の出来とほぼ同程度に拙劣である<sup>6)</sup>。彼の最も卓抜なイメージは詩的であるよりもむしろ適切で生き生きとしている。ブルーム卿を『何年間も時代の細部の間を突進している』と描写するとき、あるいはサー・ジョージ・ルイスの心を『特許標示のついた登録器』にたとえるときに、彼は最も成功している。「自己を信頼する性質の正統的な糧となるものは、若いときの孤独である」<sup>7)</sup>と彼は書いている。

彼の使う比喩のいくつかは、マコーレイの比喩に大変良く似ている。彼は誇張された直喩に対する同様の趣味をもっている——「フランスの政治家は、権威としてコルベール (Colbert; 1619-83 フランス絶対王政期の政治家で、典型的な重商主義政策を遂行した：訳註) やルヴォア (Louvois; 1639-91 フランスの政治家で軍制を改革した：訳註) の国内政策を引用しないであろうことは、ラメッシュ (Lamech) の重婚やテュバル・カイン (Tubal Cain) の音楽的業績に対して、倫理や美学の応援を求めに行くことを考えるべきでないと同様である」<sup>8)</sup>。あるいはさらに優れた詩的な直喩の例——ハートリー・コールリッジが「フットボールで名声を博したり、クリケットを修得したり、猟犬たちと仲良くすることが出来なか

ったのは、彼がチャールスの荷車（北斗七星）を追ったり、銅貨で投げ銭遊びをすることが出来なかったのと同じであった」<sup>8)</sup>。しかし、バジョットがハズリットの生き生きとした言葉の中に最高の手本を見出していたことは、殆ど疑う余地のないことである。いかに注意深く、また有益に後の時代の者（バジョット）が先人（ハズリット）を研究したに相違ないかを知るには、私がすでに第8章で引用したこれら両作家の文章を比較しさえすればよい。そしてバジョットは、その手本とする人の生气にあふれた言葉使いと警句のもっている力の多くを修得しただけでなく、その言葉に時折みられる、同じようにきびきびした口語的表現の勢いをも添えるのに成功した。『ブルーム卿』の中で彼は次のように書き記している——

ある人々の目には「気をつけよ、私は危険人物だ。我に触れるなかれ (noli me tangere)」と言っているように思われるにらみがある。ブルーム卿の顔にはこれがある。災いをもたらす激しやすさは、その最も明白な表現である。もし彼が馬であるとしたら、誰も彼を買おうとしないであろう。あのような目をしていたら、彼の気性を保証することの出来る者は誰一人としていないであろう<sup>9)</sup>。

警句と逆説の主として難しい点は、それらが読者を大そう喜ばすとしたら、それらは作家をさらに一層喜ばすものであるということである。故チェストン氏ほど多くの警句を産み出した現代の作家は恐らくいないであろうが、不幸なことに警句というものは、いったんあまりにしばしば繰り返されると、平凡になるということを十分に認識することが全くなかった。ハズリット、マコーレイ、バジョットはもっと抑制がきいていたが、気分が乗ると彼らはしばしば自分のアイデアをそれが行きづまるまで追求した。マコーレイの逆説は普通、生气と修辭に救われており、ハズリットのそれは詩と想像力に、バジョットの場合は、アイデアそれ自体の巧みさと展開のユーモアに救われている。愚かさの政治的価値と、それに対する利口さの危険を詳細に説くとき、バジョットは長々と続けるが、少なくとも彼は大真面目ではない。彼はユーモアというスパイスと、皮肉という逃げをもっている。

彼の最も卓越した言葉は、ハズリットの場合と同様に、その性格寸評の中に



見出される。表現の鮮やかさでははるかに劣っているが、彼はずっと公正で  
ぐれたユーモアをもっているという利点でハズリットにまさっている。例えば、  
次のような痛烈で不公平な判断を下すという罪を犯すことは、バジョットには  
全くない——

サウジー氏は精神の堅固をもたさず、悪はものごとの性質から不可分のものであ  
ると考えるのは我慢ならない。ちょうど弱った胃がおいしくない食べ物をはねつけ  
るように、彼の短気な気性は他にとってかわるものを拒否する。彼は希望の反対を  
願望し、全ての不信を信ずる。彼は現実の善か、空想上の善のどちらかに安らわな  
ければならない。彼は『ユートピア』（サウジーはオックスフォード大在学中、フ  
ランス革命に共鳴、共産主義的理想国の建設をアメリカで試みた：訳註）の中で道  
に迷い、オールド・セイラム（イングランドのサリスベリーの宗教上の名称：訳註）  
でそれを見つけた——

「彼の高潔な『熱情』は冷淡な中庸を知らない」

彼の熱意はいかなる疑い、遅延をも認めない。彼は常に極端に位置し、常に正道か  
らはずれている<sup>9)</sup>。

ある意味では、バジョットはハズリットよりも多くのより現実的な警句を書い  
た。彼はもっと多くの警句を概括的表現の中で扱っており、これらはたいいてい  
ユーモアに富んでいる——「礼節は個人指導教師に不可欠のものであり、尊大  
さは強みである」。さらに同じ主題に関して「校長は畏怖の雰囲気をもち、あた  
かも自分自身に驚いているかのように不思議な様子で歩くべきである」<sup>10)</sup>。彼の  
見解のいくつかは、たいそう深遠で豊かな知識と観察に基づいた、成熟した考  
察の結果である。「コールリッジは『信念』が『作品』を産み出さないばかり  
か、作品を阻げる傾向をもつ、出来そこないの精神の実例である。強烈な確信  
は彼に一種の意志のけいれんを与えたので、彼はその確信に基づいて行動する  
ことは出来なかった」<sup>10)</sup>。次の文章は彼の個人的経験から直接に生じていると  
感じられる——「『思慮分別のある』人間の間で多くの静かな知的迫害がある。  
用心深い人間は彼らに何か新しいことを告げる前にためらう。何故なら、もし  
彼がそのようなことで名を上げるとしたら、彼は『突飛な』人間と呼ばれて、  
ものごとを決定するときに彼には注意が払われないであろうから」<sup>10)</sup>。バジョッ

トにはハズリットやマコーレイのきらめきがないが、彼の著作の中で光っているものは、たいてい金である。(All that glitters is not gold. 「きらめくものみな黄金とは限らず」という諺をもじったもの：訳註)

バジョットの文体の主として優れている点は、私の意見では効果的な言葉使いという項目の下に要訳され、この効果的であるということは、主にイメージリーと逆説に依存しているが、それはまたある静寂をたたえたような、適切で正確、気まぐれともみえる生き生きとした言葉使いにも依存している。そしてそれは『意志の決然とした執念深さ』<sup>11)</sup>でケンブル (Kemble; 1757-1832 イギリスの俳優。近代写実的演技で伝統的悲劇役を得意とした：訳註) が、ハムレットを演ずるのを語るときに、程度は劣るもののハズリットが成し遂げていることである。バジョットはこの軽い技巧(効果的な言葉使いのこと：訳註)で彼の師匠をはるかに陵駕しており、それは彼の文体の最も個性的な特質の一つである。実際、彼の言語に対する姿勢は見事である。ハズリットの方がより力強い言葉の使い方をしているが、それは荒々しく、向こうみずな態度でである。彼は常に何かか——たとえそれが風車にすぎないとしても——と戦っているようにみえる。バジョットにとって言葉はものごとを解明する手段である。彼はそれらを慎重にじっくり判断した上で使用しており、影の中で幻想的な効果を得たり、奇妙で暗いちょっとした隅を照らすために、提燈のようにあちらこちらへとふざけて振り回すことがある。読者を退屈させないように、この点に関しては彼の形容詞の使い方のみを考察してみることにしよう。彼はクーパーのことを若いときは『強圧的な、あるいは厳格な学生というよりもむしろ穏やかで徐々に進歩していく学生』であり、さらに聖堂 (the Temple) の明るい書齋で『のどかな怠慢』<sup>12)</sup>の中で日々を送ったと述べている。彼はイギリスの学童を『われわれのよく知っている小柄で、りんごをかじっている動物』<sup>12)</sup>と表現している。ブルーム卿にはある種の称賛を感じずにはおれないと彼は語っている。彼は『非常に攻撃的な知性——相手を打ちのめすような強い精神』<sup>12)</sup>をもっている。しかし、バジョットの言葉使いは大抵の場合、生彩を放っているが、それは常に優雅で音楽的であるわけではない。平然と『彼の範囲は大変多様である』

と彼は書くことが出来るし、『下品な』言葉、特に『どちらにしても』(anyhow)とか『どうか』(anyway)というような会話的連結語を過度に好んでいる<sup>13)</sup>。彼は漠然とした常套句でもって、強烈な文章を台なしにしている。イギリスの憲政における儀式的、『演劇的』要素の価値を説明しつつ、彼は次のように書き記している——

その主張において謎めいているもの、その行動様式において不可解なもの、目に鮮やかなもの、一瞬生き生きとみえるが、次の瞬間にはもはや見えないもの、隠されているものとそうでないもの、見かけは特殊であるが、興味深く触れることの出来るものであって、その結果において、ただ触れることが出来るだけではないと告白しているもの。その形式がどれほど変化しようとも、われわれがそれをいかに定義したり描写しようとも、これは今なお大衆の胸を打つ種類の——唯一の種類の——ものである<sup>13)</sup>。

『種類のもの』というような表現は、真に良心的な名文家の骨の髄を凍らすであろうが、バジョットは論考の最も重要な点で安々とその言葉を導入している。

しかし、恐らく彼の最悪の欠点は、語句の節約に失敗していることであろう。執筆を試みる際にはまず、いかに言葉を使用するか、次にいかに言葉なしですますかを学ばねばならない。バジョットはその二番目を決して学ぶことが出来なかった。私は彼が浅薄であるとか散漫であると言っているのではない。『思想』においてこれほど簡潔な作家は少ないからである。彼の評論を読んでいると、われわれは多くの偉大な思想に接しているという感じを抱くのが常であるが、時としてそれらの思想がもっと簡潔に表現されていたらと願うものである。彼が文筆に対する測りしれないほどの勇気を持ち、われわれが天気についておしゃべりするのと同様に、狼狽せずに白紙の原稿に文字を書き連ねるであろうことは確かである。彼の言葉は会話の調子のみならず、その多弁さをいくらかもっている。彼は時に一語でもっと力強く意味を伝えるであろう場合に、邪魔な言葉を使っているのである。彼は話題を変える際に、話者の犯す不注意な冗語に陥っている——「さらに、そのうえに、やがて時代の進歩と文明の進展は新たな種類の詩を産み出すように思われる」<sup>13)</sup>。バジョットの熱中癖と読者の

知性を彼が低く評価していることのために、その思想を不当なほどくどくどと解説することにもなっている。彼はハズリットのようにその思想に刃先をつけようとして、全くなくなってしまうまでそれらを研摩するようなことはしないのは事実であるが、理解されることを時折、痛ましいほどあからさまに切望する。彼は時として沈んでいるようにみえるが、それは彼が極度に緊張しているときである。

バジョットの文体を表現するのに、それはこれほど有能な人間にふさわしいと言う以上に適切な表現はみあたらないであろう。それは偉大なヴィクトリア朝の文体の一例でもなければ、細心の注意をもった芸術家の文体でもない。しかし、それは適切で才氣にあふれた精神を忠実に映し出す鏡である。そして事実、彼の著作を読んでいると、われわれは卓越した表現力というよりむしろ偉大な思想と対面していると感じる。私が彼を過小評価したり、彼の著作がハズリットとマコーレイからの単なる寄せ集めであるとほめかしているように思われては困る。バジョットの著作には前者の詩的で論争好きなところがなければ、また後者の高ぶった激情もない。それははるかに控え目で抑制がきいている。より理性的な判断と、より注意深く成熟した考察を包含している。より気楽で会話的であるが、力強く生氣にあふれ、警句的である。私がすでに注意を促した、あの言葉使いの効果的であることを含めて、その独特の長所はハズリットもマコーレイももっていなかった、ユーモアの資質に依存している。

ウィットとユーモアを自在に駆使するバジョットの力量は、非常に広範にわたり、包括的であるので、彼が卓越しているものよりはむしろ避けている種類のものをいくつか述べることによって始めるほうが簡単である。彼の面白味は決して騒々しいとか、茶番めいてはいない。それは感情や同情をあらわに示すことはめったにない。主観的、個人的であることは稀である。自分自身に対して上品にユーモアを向けるという、イギリス人には大事な才能が彼には欠けている。彼は時折、皮肉っぽく、無知で天真らんまんて愚鈍なふりをする——つまり、自己の長所を茶化すが、決して欠点を笑い物にすることはない。時には読者とともに笑ったり、読者をあざ笑ったりするが、ウォルター・バジョット

を嘲笑することは決してない。それが欠落していることは、必ずしも重要なことではないと私は思うが、そのことはある種の傲慢さ (Übbris) を示しているのかもしれない。これほど頭の良い人間が愚鈍な人間を見てこれほど面白がるということ、全てのことについて明快、論理的で納得のいく理論をもっている人物が、何かについて明快、論理的で納得のいく考えを一度ももったことのない人々を喜ぶということは、明らかに疑わしいことである。バジョットが1852年に陽気に皮肉を込めて次のように記したのは、彼自身の心の中で明晰さに満足げな一瞥を与えつつであったのだろう。

旧式な考えをもつ世代の堅実な労働によって、教会の庭でまどろむ者達の風変わりな骨折りによって——退屈な配慮によって——愚かな勤勉さによって、どういふわけかある種の社会的構造が存在している。人々は努めて仕事に出て、夕方まで実際、自分達を雇ってくれる仕事を見つけようとし、肉体と魂がそれに没頭させられる。そしてこれが6000年にわたる苦役と苦勞に対して人類が示している姿である<sup>14)</sup>。

しかし、もし彼が時として自らのユーモアに自信をもちすぎているようにみえるならば、彼の欠点は平凡さというよりもむしろ他人に対する軽蔑、そして恐らく後期においては特に、生来の超然とした精神と、確固とした慎しみ深さに帰すべきものである。彼は読者と主題の間に自らの個性を介入させるのを避けている。『フランスのクーデターに関する書簡』はこの見解に対する一つの例外であるように思われるが、そこでは自己に言及するのにある明確な芸術的理由がある。ある状況について最も月並みな意見のみをもつ、愚鈍で無知な人間を装いながら、敬虔なユニテリアンの読者達に対して自らの発表する極度に逆説的な理論を倍、衝撃的にしている。他人の場合と同様、自己の滑稽さを知覚することの結果であり、このような滑稽さを生と死という畏怖すべき神秘を背景として眺めるような、非常に同情的で想像力に富む洞察に依存している種類の笑いに関しては、バジョットにはこのようなものは殆どみられない。かなり顕著な一例が事実、『ハートリー・コールリッジ』の中に存在している——

ハートリー・コールリッジはウェリントン公とは似ても似つかぬ人間であった。子供達はいくつ先頃死亡した偉大な政治家にして軍人であった人物（ウェリントン公のこと：訳註）の手本によって、彼がやったように『自分達の書物』をおろそかにするのではなく、勤勉で儉約家となるよう勧められる。『常に本分を果たし』、『遅延に気をつけ』、『必らず最善を尽くす』よう促される。それらはマラッタ人（インドの中部から西部に住む Hindu 族の好戦的な一支族：訳註）の処置に関する巧みな手早い処理に言及することによって確かめられるような立派な考えである……しかし

「この悲しむべき世界は、何という荒野であろう！

もし人間が常に大人で、決して子供でないとしたら。」

さらに、活動の退屈な単調さを救うために、生涯を通して子供であるような人々がいくらかいないとしたら、さらにひどい荒野に近い。気まぐれな衝動に基づいて行動し、意志が湧き起ったことは一度もなく、苦役も糸を紡ぐこともせず、『うるわしきエデンの園の純真さ』を常にもっているような人々がいないとしたら。そして、そのような人間がハートリー・コールリッジであった。グレイはホレス・ウォルポール（Horace Walpole 1717-97 英国の作家）に宛て、こう書き記している——「今は偉大な政治家であるB卿やサー・H. C. やD子爵がクリケットで遊んでいる、汚ない小さな少年であった時のことを覚えていらっしゃるのですか。私自身はクリケットをしていた当時より、今もっと年をとったとか、賢くなったとは少しも感じていません』。というのは、自分達の知性をそれらに最も近いものに注ぎ、常に努力し、ロンドン塔を治め、水先案内協会に入ること——つまり、軍隊を指揮したり、水先案内人達を応援するという目的を遂げる人々がいるように、明日考えればよいことを今日常に心配し、決して成功せず、この世から無視され、商人からは問題にされず、昔のままの場所に居続け、悲しみを生じさせ、愛され、嘲笑的であると同時に天恵であり、この世で生きず、死の中で死なない、どこにも身の置き所のないように思われる人々もまた存在するからである。そしてそのような人間がハートリー・コールリッジであった<sup>15)</sup>。

感傷性によって価値を損なわれているとはいえ、その文章は私の意見では、誠実な感情と詩的な想像力にあふれているといえる。それは存在のより深い意味についての様々な暗示に満ちている。しかし、概して彼の笑いには宇宙的響きが全くない。その暗示するものは深遠で洞察力に富んでいるが、広大無辺で途方もないということは稀である。彼は人気者達の間で頭角を表わす人間ではなくて、多種多様な活動に従事している人々をあざ笑っている。

しかし、バジョットが優れているのは、ユーモアというよりウィット、すなわち、冷静、客観的で気まぐれな知性である。この領域内で彼はごく単純な言葉の遊びから、鋭く移り気な滑稽味の快いほとばしりに至るまでを守備範囲としている。彼のウィットは二つの長所をもっている——つまり、それはポイントを欠いていることは決してないと言ってよく、また意地の悪いユーモアを帯びていることも全くない。数少ない駄洒落(puns))ですらも、再考に耐えるであろう。ギボンの文体はあまりにも壮嚴でありすぎると彼は述べている。「彼は『小』アジア(Asia Minor)に言及することが『出来ない』」<sup>16)</sup>。

バジョットの警句と、それらを彼のウィットと引き離して論ずることの困難さについては、私はすでに語り終えた。彼がその語りの中に散りばめている、閃光を放つような評言にも言及した。これらの多くは楽しくなるほど気まぐれで、優しさに満ちており、ウィットというよりむしろ一種の軽いユーモア、あるいは恐らく両者の混合と考えられるかもしれない。クーパーの恋人のセオドラは、『一度も結婚しない』。愛は彼女を葬らなかった。たとえそうであっても、少なくとも彼女はこれらの出来事より60年以上も長生きをしたのであるから、それはずっと作用していたのである。しかし、そのあと彼はまるで自分の言葉から何か針でも除くためであるかのように、次のように付け加えている——「彼女は表面上は決して過去を忘れなかった」<sup>16)</sup>。彼の面白味のいくつかは、単なる陽気さにすぎなくて、ポイントに欠けているようにみえるかもしれない。だが、一例をとりあげてみよう——

歴史は無用のものであるといわれている。そのような種類の労作を出版したと思われる少なくとも一人の偉大な批評家はつい先ごろ、この種の著作が宇宙に関する理論を確立せず、それゆえに役に立たないと断言しているように思われる。しかし、この種の創作それ自体と、抽象的にみた場合の効用が何であれ、それは確かに相対的には、そして文学者にとっては大いに有用なものである。そのような種族の人間の立場を考えてみるがよい。彼は上等の原稿用紙、上等のペン、第一級の文体を備えて、書斎の暖炉のそばに坐っている。全てのことを語るためのあらゆる手段があるが、語るべきものは何もない。勿論、彼は有能な人間であり、素晴らしい教養に加えて、能動的な知性をもっている。だが、それでもなお人は常に独創的な

考えをもつとは限らないのである。一日一日が一つの時代になれるわけではない。一連の新たな思想がたびたび発見されることはないであろう。そしてものを書くことを仕事とし、ものを書くために部屋に一人っきりで居続け、何も語るべきことがないとは、何と退屈なことであろう！ ペンを7本修繕し、理論が『生ずる』のを待つとは、わびしい作業である。もし、何かが起こってそれを描写出来れば、何ともうけ物なのであろう。何かが起こった、そしてその何かとは歴史である<sup>10)</sup>。

私はそのようなウィットにはポイントが欠けているとは毛頭思っていない。その文章は作家であることの全心理と動機についてのコメントを包含している。さらに、彼の冗談の一つ一つに深遠な意味を見出す気にはならないが、概してバジョットは手当たりしだいに空中に向けて狙撃するように無意味なことをやたらと書き連ねることは、極めて稀である。

その語りの中で、バジョットは喜劇的アイデアを並はずれて把握していることを示している。伝記的評論と批評論が喜劇でありうる限りにおいて、『メアリー・ワートリー・モンタギュー夫人』と『エドワード・ギボン』はそのようなたぐいのものである。両者は十分に定義された喜劇的アイデアを含み、断続的にまたかなり事細かにではあるが、たいそう巧みに論じられている。最初の評論では、大胆で落ち着きのない策略家の女性、メアリー・ピエールポント嬢が、理想的結合という途方もない希望を抱いてワートリー・モンタギュー氏に激しく求愛し、彼を勝ちとる。しかし、数年間の夫婦生活のうち、彼が大変退屈で腑甲斐無い男性であることに彼女は気づくのである。二番目の評論では、気楽な男性であるギボンは、一連のひどく不自然な姿勢と状況にあるのが描かれている。彼は平和的に黙り込んで懷疑論者となる狂信者、賢い女性より充分な収入を選ぶ恋人、戦いよりディナーをとる兵士、革命を起こそうという群衆がギロチンにかけるであろうようなたぐいの人間であることを内心恐れている政治家として登場する。これらの語りの双方において、バジョットは事実を歪めたり、重大な省略をすることなく、その主題を読者の心の前に断えず生き生きと提示し続ける非凡な才能を示している。これほど多くの短い伝記を書いているしながら、もっと長編の伝記を彼が一度も試みなかったということは、残念なことであろう。



## 第10章 原文註

- 1) ii. 155-156, 148; iii. 182, 183; "Crabb Robinson," v. 53-54.
- 2) "Bagehot as an Economist," *Fortnightly Review*, n. s. xxvii (April 1880), 556.
- 3) i. 107-110; "Hartley Coleridge," i. 200; "Coup D'État," i. 93.
- 4) Hazlitt, "Jeffrey," *The Spirit of the Age*, iv. 315; Bagehot, "Edinburgh Reviewers," ii. 68.
- 5) "Cowper," ii. 18.
- 6) See pp. 152, 191.
- 7) "Brougham," ii; 285; "Lewis," iv. 189; "Pitt," iv. 6.
- 8) "Coup D'État," i. 97; "Hartley Coleridge" i. 188-9; ii. 307.
- 9) "Mr. Southey," *The Spirit of the Age*, iv. 263.
- 10) "Hartley Coleridge," i. 197; On the Emotion of Conviction," v. 103; Physics and Politics," viii. 62.
- 11) "Hamlet," *Characters of Shakespear's Plays*, i. 237.
- 12) "Cowpor," ii. 8, 9; "Clough," iv. 120; "Brougham," ii. 313.
- 13) "Dickens," iii. 8; "English Constitution," v. 164; "Hartley Coleridge," i. 206.
- 14) "Coup D'État," i. 84.
- 15) i. 187-188. The verse quoted is from Hartley Coleridge's "Sonnet to Childhood."
- 16) "Gibbon," ii. 161; "Cowper," ii. 13; "Gibbon," ii. 157.